

速吸名門異考 古史傳六附錄

和書門			
函	架	號	類
四〇	二	一五八	類
冊	架	函	類

內閣文庫			
函	架	號	類
四〇	二	一五八	類
冊	架	函	類

內閣文庫	
番號	和 42518
冊數	40 ( 37 )
函號	140 185





1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10  
11  
12  
13  
14  
15  
16  
17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26  
27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49  
50  
51  
52  
53  
54  
55  
56  
57  
58  
59  
60  
61  
62  
63  
64  
65  
66  
67  
68  
69  
70  
71  
72  
73  
74  
75  
76  
77  
78  
79  
80  
81  
82  
83  
84  
85  
86  
87  
88  
89  
90  
91  
92  
93  
94  
95  
96  
97  
98  
99  
100

1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10  
11  
12  
13  
14  
15  
16  
17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26  
27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49  
50  
51  
52  
53  
54  
55  
56  
57  
58  
59  
60  
61  
62  
63  
64  
65  
66  
67  
68  
69  
70  
71  
72  
73  
74  
75  
76  
77  
78  
79  
80  
81  
82  
83  
84  
85  
86  
87  
88  
89  
90  
91  
92  
93  
94  
95  
96  
97  
98  
99  
100



速吸名門異考 古史傳六之卷附録

氣吹酒舍門人 豊後国 田近長陽考

此考ハ往し明治五年と云年に佐賀關小物しむる也。試記して其是や非やを師翁鏝胤翁をさし。本文中師説おど云へるハ。篤胤翁をさに問ひまをし、或。其返事に古史傳之御追考。速吸門スエナド之御考説等夫々并見中ニも速吸門之事ハ。一々御尤之御事ニて。先人之説とハ違ひ候へども。悉的當いとし候様被存候。元來地理を知られざる所を也。考説も粗漏ある事。今在世ニ候ハ。必御説ニ隨ひ可被申候。猶又傳之方ハ申迄もあく。悉く御詳説ニて。先人も嘸々満足可被



致被存候。尤も兩様共早速靈前へ相備へ申候事ニ御坐候。一、白濱黒濱之石ニ御贈被下。得と辨見いぬ候処。清淨美質目を驚う候事ニて。いふ小も靈跡疑ひなく被存候。と答おこされし故に。稿本一部早速吸日女神社の舊宮人小贈シタガキにせりしを。彼神社の祠官關眞龍セキマツい。其産子等を勸免て。此残板に彫カク。其形木を神庫ホクラに納まむとせり。小就死て。此を古史傳六之巻に附録とせられまふし死を去年の冬伊吹之舎イフキに請まをしく。矢野翁小も議られむふれば。其稿本をおくマてと。と云おこされしからに。送ホドに。悲し死うも遺憾クナしきうも。二世

翁既に歸幽せられ小死。矢野翁さへに肺疾患ヤれて。此稿閱らるゝ事マに。かゝるに。月日經る小。今度三世翁をマ。舊年中御廻し被下候。速吸名門異考之事。矢野氏へ相談致し候処。同人申ニハ至極之御妙説と被存候。西田氏之説何分信用も難致存居候処。始て明白相成候と申居候。古史傳六卷附録と被成候て。少う差支無御坐候。と答おふされぬ。故清書せむとせり。猶彼地の事眞龍マコに委く問聞くに。曩サキ小記漏せる事此多々れば。其事マも加ねて。記加へたる小おむ。其マしあといらでハ。前後の文意聞え難きを。後云ふと徴マをへく。さ。時ハ明治十四年五月マ。も亦きをバ更に徴マさむ。



速吸名門ハ。神代紀ハ夙く見えて。人能く知る處あるを。其  
所在傳ハらば種々論あるを。然るを豊前国小倉人西田  
直養翁。速吸門考を著ハシ。豊前国企救郡早鞆湍門ハヤトモノセありと  
説ハレ。其を故翁も用られてあり。早鞆湍門小ぞ究キハバ。此  
是然る説ハ。縁法々れ。式ある豊後国早吸日女神社を。徒  
に捨む事の惜しげきバ。故翁を始直養翁小。無禮し死ナ己メざ  
小ハ。何れ。吾ハ口訣及記傳の説に従ひ。豊後のかコに説  
のまマし死シ心コちチせセられレて。亦一。此考をバ立タてテるルありリ。直  
翁記傳の説を捨られおカらラ記傳に拠ヨとせられレ。此コの事コトを。少シカも辨ハへられレざるハ。いハうハふフぞゾ。や。皆先云  
おくク法ホウきキ事コトありリ。長陽未其速吸門考ナガハル。全本を得見されバ。

のノにニ加カくクにニ論ロ難ナン々々れレ。古史傳コシデン小引コヒキられレるルが。凡其考説  
をバ。洩モラさサまマ引ヒうウれレ。巴ヒ々々に思オモふフまマにニまマ。古史傳ある  
残據として論ロひヒ。且彼考を辨ハふフにニも。古史傳にニありリあるルと  
故コ。其考説をバ悉コトク小ハ掲出カケイデ。故此異考を見むにハ。先古  
史二十三段の傳シ。六之卷二十七丁シ。を熟ユくク閱ミおハ死シ。さて吾  
が此異考に對オ閱ミて。其異同を辨ハふフ法ホウし。抑速吸名門の豊後  
あらむと云據ハ。神名帳に豊後国海部郡早吸日女神社。仁  
明天皇紀承和十年九月。豊後国無位早吸咩神奉授シ。從五位  
下シ。陽成天皇紀元慶七年九月。豊後国從五位上早吸咩神授シ。  
正五位下シ。從五位上を授奉給へるルあり。御紀に洩モラさサるルとシ。  
唐橋君山主シ云れル。○唐橋氏の豊後



因志に引うれる御紀の文は、咩字の上には、字あり、苗  
印本に古写本に依るに、依られしも、此と思へど、此、人ひ  
さぶるに、儒者小て、古文を尚るに、非れ、御紀に、脱れ  
り、と、して、狡意に、加へられし、に、御紀に、比、字、を、書、う、れ  
さる、ハ、早、ス、ヒ、ヒ、メ、と、ビ、音、重、あ、る、故、に、畧、加、れ、さ、る、ハ、速  
サ、ス、ラ、ヒ、ヒ、メ、あ、る、を、式、小、速、佐、須、良、比、賣、と、書、う、れ、蟬、則、比  
賣、を、出、雲、風、土、記、支、佐、加、比、賣、と、書、か、れ、さ、る、に、同、し、さ、れ  
ば、古、ハ、ハ、ヤ、ス、ヒ、メ、と、唱、さ、る、ハ、古、稱、を、亡、ひ、今、又、古  
奉、正、六、所、權、現、あ、ど、申、し、ハ、ハ、ヤ、ス、イ、ヒ、メ、と、唱、め、る、ガ、も  
社、号、ろ、復、し、さ、る、も、音、便、故、に、ハ、ヤ、ス、イ、ヒ、メ、と、唱、め、る、ガ、も  
し、御、紀、の、文、に、も、と、づ、う、む、も、ハ、ヤ、ス、イ、ヒ、メ、と、唱、へ、む、ハ、非、ぞ  
其、を、ス、ヒ、の、ヒ、を、省、き、て、ヒ、メ、の、ヒ、を、省、く、べ、き、に、非、祿、ハ、あ  
り、序、に、云、古、事、記、あ、る、大、戸、惑、子、大、戸、惑、女、神、此、御、名、を、兩、大  
人、加、に、か、く、に、説、う、れ、さ、れ、ど、此、ハ、惑、彦、惑、媛、の、義、あ、る、を、  
ト、ヒ、ヒ、コ、と、ヒ、音、重、あ、る、故、に、一、の、ヒ、を、省、き、て、唱、ふ、る、事、を、  
示、し、て、亦、書、か、れ、し、あ、り、二、音、重、れ、る、ガ、省、う、る、例、ハ、河、原、を、  
カ、ハ、ラ、飯、櫃、を、イ、ビ、ツ、干、肉、を、ホ、ジ  
シ、猪、垣、を、シ、ガ、キ、あ、と、云、是、あ、り、  
坐、セ。御社に奉仕れりし、関、真、童、小、野、秀、彦、等、に、問、聞、き、て、記  
せ、る、社、藏、あ、る、早、吸、日、女、神、社、略、記、と、云、物、小、月。此、書、記、せ、る、年  
か、正。を、も、載、せ、る、苗、記、古、文、書、ハ、悉、慶、長、の、兵、火、に、亡、さ、る、を、し、此  
畧、記、を、其、後、神、官、等、此、記、集、し、物、と、ぞ、此、書、こ、に、引、く、文、の  
外、ハ、書、紀、苗、事、紀、あ、ど、の、速、吸、門、の、事、此、あ、る、又、続、舊記  
後、紀、あ、と、此、神、階、を、授、奉、給、ひ、し、文、あ、ど、書、集、し、物、あ、正。舊、記  
ニ、古、老、傳、説、ニ、曰、天、眞、宗、豐、祖、父、帝、ノ、朝、ニ、日、向、ノ、因、造、長  
云、此、時、の、事、大、密、元、年、と、い、れ、ハ、郡、縣、の、制、に、草、免、ら、れ、て、よ  
り、五、十、年、は、か、正、小、や、及、ぬ、ら、む、さ、れ、バ、因、造、ハ、い、う、次、よ  
引、く、一、本、に、因、司、と、い、京、師、二、到、ノ、頃、船、五、十、余、艘、ヲ、當  
る、ぞ、然、る、べ、う、ら、む、  
因、海、部、郡、速、吸、ノ、洋、ヲ、過、長、陽、云、洋、次、よ引、く、一、本、ハ名、門、  
と、い、り、又、此、記、中、小名、門、ハ洋、也、と  
因、名、門、に、同、意、と、聞、え、さ、り、速、吸、名、門、ト、云、ハ、豐、祿、兩、州、之、際、間  
纜、二、三、里、ナ、リ、一、許、里、ニ、ノ、嶋、ア、リ、鷹、嶋、一、云、鷹、才、ホ、キ、ガ、故

坐、セ。御社に奉仕れりし、関、真、童、小、野、秀、彦、等、に、問、聞、き、て、記  
せ、る、社、藏、あ、る、早、吸、日、女、神、社、略、記、と、云、物、小、月。此、書、記、せ、る、年  
か、正。を、も、載、せ、る、苗、記、古、文、書、ハ、悉、慶、長、の、兵、火、に、亡、さ、る、を、し、此  
畧、記、を、其、後、神、官、等、此、記、集、し、物、と、ぞ、此、書、こ、に、引、く、文、の  
外、ハ、書、紀、苗、事、紀、あ、ど、の、速、吸、門、の、事、此、あ、る、又、続、舊記  
後、紀、あ、と、此、神、階、を、授、奉、給、ひ、し、文、あ、ど、書、集、し、物、あ、正。舊、記  
ニ、古、老、傳、説、ニ、曰、天、眞、宗、豐、祖、父、帝、ノ、朝、ニ、日、向、ノ、因、造、長  
云、此、時、の、事、大、密、元、年、と、い、れ、ハ、郡、縣、の、制、に、草、免、ら、れ、て、よ  
り、五、十、年、は、か、正、小、や、及、ぬ、ら、む、さ、れ、バ、因、造、ハ、い、う、次、よ  
引、く、一、本、に、因、司、と、い、京、師、二、到、ノ、頃、船、五、十、余、艘、ヲ、當  
る、ぞ、然、る、べ、う、ら、む、  
因、海、部、郡、速、吸、ノ、洋、ヲ、過、長、陽、云、洋、次、よ引、く、一、本、ハ名、門、  
と、い、り、又、此、記、中、小名、門、ハ洋、也、と  
因、名、門、に、同、意、と、聞、え、さ、り、速、吸、名、門、ト、云、ハ、豐、祿、兩、州、之、際、間  
纜、二、三、里、ナ、リ、一、許、里、ニ、ノ、嶋、ア、リ、鷹、嶋、一、云、鷹、才、ホ、キ、ガ、故



二名トス。今高嶋ト云。長陽云此里數いぶうし。此記の末も名所方角抄を引て海上七里と云。今現に七里何れハ三里とあるハ非ず。と前ハ思へ巴し。後藤眞守ガ六神社考に大古ハ四国九州の間海狭く川の如くあり々む。国土の太るに隨ひて開きり々む。と穴門の例を以て云へる言と。田近正徳ハ鑛山の事に勞き其業に委き西洋人をも雇ひて地質の事ふと屢問聞し。をいふガ正徳ク言も全眞守此説に同じ死とを思へむ。大古の里程古老の傳説に存せしを苗亦其陝間ニ暗礁記に記せしも此あらむも知るべうらま。高疾ケ水ト云。今高遠上ト云。長陽云此礁の事委く下に云べし。満汐至アリ。高疾ケ水ト云。今高遠上ト云。長陽云此礁の事委く下に云べし。満汐至ル毎ニ。此石ニ觸テ天河瀉力如。往來ノ艇舶是ニ擬ス。潮満湛ト云へ氏国造ノ船進マズ。水主梶取ニ至迄是ヲ怪所ニ。忽波上ニ神光アリ。国造是ヲ見テ希有トス。親見ニ及暗礁ノ上ニ神劔アリ。国造思ヘラク。速吸ハ上古ノ神境也。是則

神變神用ナラン。長陽云神用とハ見おれぬ熟字を巴。若于

時偽砂眞砂姉妹ノ蚤アリ。二女ハ白ヶ濱黒ヶ濱ノ荒魂ナ

リ。長陽云。偽砂ハイサゴ。眞砂をマサゴと訓むとし。予ウ見砂白砂に作て然るへきを。二濱ハ砂礫純白純黒ニノ衆色

ヲ雜ヘズ。清淨ニノ神遊ノ地也。異稱日本傳云。豊後国海部郡佐賀関有白濱黒濱。生黒

白石若置碁子。○長陽云此二濱の奇し死事ハ。橘南谿子ガ西遊記小もろこし。玄宗皇帝此御時日本よ巴黒白自然の碁石を獻む。其石冬ハ暖みして夏ハひや。かふ巴。故に冷暖玉といふ。日本に手談池といふ有り。其池中ニ集眞嶋有。其嶋上ニ凝霞臺有り。此臺辺皆此冷暖玉ふ巴。帝も希代の珍宍ふ巴とて甚是を愛し給ふと云。此事ハ絃詠史ふど。其外唐土の書籍に多く見へ。巴。予ウ九州に遊ひし時。豊後に其所有りと聞て。をふち行て見る。佐賀此関よ巴。東南の方に入る。木こ巴。此山路いと荒て。行先たゆつうふきに。藤山吹ちり残りて。いと深く霞あゑと巴。妻木こる山う



初子道をきつ祿て日影もたや午に過る頃山城皆の母り  
洗くしてを免て朗ふる所に出さば遙小むうふれ山の  
麓に藍を穿多るうあといと清らかみ青み渡りさるを  
入海なば海に添ふて漁村の磯あれし小松の間に漁夫  
の住家軒を並へて行かう人ハ豆れあとかちあたる舟  
ハ木葉に似て人間の世界よあらば對をれハ常に画中にあ  
る心地して人間の世界よあらば對をれハ常に画中にあ  
の濱白の濱といふ所は山二つ三つを隔さば白きハ雪  
此おとく黒きハ漆のおとく海辺皆かくのこくとく小して  
色異ふるをまじへて海までもかくのおとく小して白の濱  
ハ潮までも白きやうに見へ黒は濱ハ又黒みじまを掘  
り穿ても沙土ふし其きよらうある事とへんをのふし  
唐土の書籍に手談池といへるハ此入海をいふあるへし  
集真嶋といへるハ出崎北山をいふなるにや凝霞臺ハ出  
崎の山の絶頂小肥後族よ異國賊船北遠見小置さる  
番所あば渺漫さる大海に突出て高く聳へさる山のいせ  
されに築き立さるハ誠に凝霞臺ともいひつべしといひ  
又豊後國志小も海濱有五浦其一曰白濱海面水色潔清白  
石糝々無一他石之雜汚其石瑩白玲瓏如玉不假製造可碁  
子其二曰黒濱云々海面廣二百餘歩水色如積鐵水底皆黒

石亦他石不雜其石眞黒有光又自然碁子云々其五曰手  
浦云々按杜陽編段作譚蓋手譚是圍碁之稱故改之曰大中  
中日本國王子來朝云々王子善圍碁上敕待詔顏師言對手  
王子出楸王碁局冷暖碁子云々本國之東三萬里有集真嶋  
上有凝霞臺上有手段池中出王子不由制度自然黒白  
分明冬温夏冷故謂冷暖王更産如楸王狀類楸木琢之爲碁  
局光潔可鑑按臺上有手譚池上字當作下云々あどあるが  
如し西遊記の文ハ上浦御社のうさなり遠見山と牧の間  
に出る道を登行しさまあば入海と云れど入江をあし濱  
のささみを然見あしさる小や集真嶋ハ群玉韻府に集賢  
嶋に作る賢ハ賀の誤小て集賀あるべきなり唐橋氏云れ  
地門司赤馬の兩関小對ひ内海の門ある故に外寇此備に  
置かれし事南谿子此言の如し関の稱も是故あるは言  
慶よ藤原純友叛逆の時関を置れし故と云ハ唐橋氏の言  
此如く非あり其志し論ハれさば就て見るべしさて  
黒ガ濱ハ大黒小黒とて二濱あり白ガ濱ハ一濱あるが其  
辺二三の濱白石に他石少雜れるのそよて小白とも云べ  
きさまあば石の太經三四寸よ小を豆の如きまで大小  
定らば黒ハ平めあり白ハ丸し冬温ありと云ハ妄あば夏

○速吸名門異考古史傳六附録。六



も冷あるハ石此常にて此石に限るに非文。碁洞浦劫浦を  
と圍碁に像れる名此辺に多し。まふ兩濱の石を拾採る事  
を神の惜ましめて。聖し死事のありし物語も。うら聞持  
れど。事長々れハ云ハ。長陽嘉永二年。此秋初て行見。眩  
し時ハ。白が濱の石。雪の如く玉の如く。濱の限充満て。眩  
むか。正ありしに。安政五年の春。行見し時ハ。白石。悉海中  
引落して。清き潭に。安政五年の春。行見し時ハ。白石。悉海中  
のみ。残れ。死。是ハ。或。や。あ。と。あ。き。人。此。石。を。依。に。納。て。多。に。伊  
取。ら。れ。し。よ。り。か。く。あ。り。と。ぞ。さ。て。山。家。集。の。詞。書。に。伊  
せ。れ。さ。う。し。と。申。嶋。小。ハ。こ。い。し。の。あ。ろ。の。う。き。巴。侍。濱。よ。て。  
く。ろ。ハ。ひ。と。り。も。あ。ら。ば。む。う。ひ。て。屯。が。し。ゆ。と。申。え。く。ろ  
う。ぎ。り。待。る。え。と。あ。る。ハ。疑。あ。く。此。濱。の。事。小。て。伊。勢。と。せ。る  
を。誤。る。巴。ま。古。河。元。辰。が。西。遊。雜。記。の。此。濱。の。事。を。云。る。糸  
に。他。石。さ。ら。に。交。ら。ば。正。南。の。う。の。數。万。里。の。大。海。よ。して。大  
風。の。時。小。ハ。大。浪。を。う。ち。よ。せ。て。山。の。腰。ま。て。も。う。ち。あ。る  
浪。の。へ。ま。黒。白。此。小。石。一。に。ま。ぜ。り。合。ふ。事。あ。る。に。風。や。み。海  
濱。の。り。う。に。あ。れ。バ。い。り。と。あ。く。黒。ハ。く。ろ。白。ハ。あ。ろ。と。左。右  
へ。り。う。り。海。底。ま。至。る。ま。で。定。木。を。以。て。さ。ち。合。し。や。う。に。黒  
白。此。り。う。ち。明。也。と。云。へ。る。を。始。濱。の。廣。石。の。太。あ。と。を。云。る。  
皆。甚。く。實。に。違。へ。巴。此。人。彼。南。谿。子。が。霧。嶋。山。の。絶。頂。を。極。免。

御銚を并せし事。此西遊記に。ある。或。妄。かり。と。て。甚。く。咎。め。  
又。林。友。直。此。三。國。通。覽。圖。說。に。蝦。夷。地。の。説。を。實。に。違。へ。巴。と。  
て。言。を。極。免。て。罰。り。己。ハ。を。べ。て。人。れ。談。を。聞。て。ハ。記。さ。び。自。  
其。實。地。を。踏。て。書。せ。る。と。い。ふ。煩。ハ。し。き。ま。で。云。さ。れ。ど。此。二。濱  
を。ハ。行。見。さ。れ。バ。こ。そ。か。い。恠。妄。を。ハ。記。し。さ。ま。二。濱。の。間。山  
二。三。隔。れ。る。あ。と。西。遊。記。小。云。へ。る。如。く。あ。る。を。バ。人。皆。知。る  
如。あ。る。を。定。木。を。以。て。云。く。あ。ど。何。て。ふ。狂。言。ぞ。も。元。辰。己。が  
記。せ。る。如。く。あ。ら。ハ。西。遊。記。を。罵。巴。あ。が。ら。何。ど。て。彼。文。を。む  
破。洩。せ。し。ぞ。是。に。よ。巴。て。東。西。兩。遊。雜。記。に。嚴。嶋。の。鳥。啄。上。の  
神。事。速。靴。の。海。布。刈。の。神。事。鹽。竈。神。社。の。御。釜。の。事。を。始。聖。異  
あ。る。事。と。し。云。へ。ハ。甚。く。嘲。り。と。る。も。事。此。虚。実。を。を。亂。さ。び。  
己。う。狡。意。の。隨。に。吐。け。る。言。あ。る。を。辨。ふ。べ。し。是。ハ。南。谿。子。林  
子。平。等。が。慰。冤。の。爲。事。此。序。小。辨。へ。於。さ。て。西。遊。記。二。蜚。扁。舟  
西。遊。雜。記。紛。ら。ハ。し。紀。書。名。あ。巴。混。む。べ。う。ら。む。二。蜚。扁。舟  
二。棹。シ。良。ノ。方。ヲ。望。テ。數。多。ノ。大。船。小。船。名。門。ニ。漂。泊。ス。ル。ヲ  
見。經。ニ。因。造。ノ。船。ニ。近。ツ。ク。因。造。是。ヲ。見。問。汝。等。ハ。何。人。ゾ。ヤ。  
蜚。答。云。小。女。等。ハ。速。吸。六。神。ノ。神。屬。ナ。リ。祭。主。ヲ。待。此。ニ。有。事



淹願神劍ヲ被上テ祭祀セシ夏ヲ請其言ノ如ニメ船ヲ曲  
浦ノ裏ニ繫テ得處ノ神劍ヲ神ノ御魂トメ。廟社ヲ曲浦ノ  
田刈穂ニ立テ。祭祀メ去ヌ。船ヲ繫シ處ヲ。今ニ日向泊ト云。  
田刈穂ヲ高風ト云。今ノ古宮ナリ。長陽云古宮の趾ハ古宮  
村の字太田と云。処の山  
中に人功此跡少ク存。二人ノ蚤ヲ若御子ト云。末社也。長陽  
社も眞竜の言に。稚御子ハ鼻に。石社二座在りて。二人  
ハ蚤を崇む。陰曆の八朔ハ蚤等集ひて祭るをし。六神神  
代ヨリ此ニ坐ト云ヘ也。此時ヲ鎮座ノ始トス。于時大寶元  
年也。と云。まゝ一本に。訓点ハ眞竜ガ  
差とるあり。舊記。人皇四十二代。  
文武天皇之御宇。大寶元辛丑年。日向之罔司上京都。艤船五  
十餘艘。到早吸名門。于時罔司之船曾不進。船中怪之。又於名

門有異曜。罔司愈恐懼之。遣所乘艇有來者。罔司招之。問曰。汝  
等者誰耶。對曰。此處之蚤女也。罔司曰。吾欲渡此名門。船曾不  
進。又於名門有異曜。于常如斯。有之歟。對曰。非常也。思於早吸  
名門之海底。有靈劍一口。數多之鮪魚守護之。不流。蚤等奉潛  
揚。爲早吸神之神躰。於曲浦地。營宮。欲奉鎮坐。待祭主。歲久。今  
留公。船現神光。既時來歟。願公潛揚神劍。建宮於曲浦之地。可  
奉鎮坐。罔司曰。唯然。汝等可奉揚御神躰耶。對曰。奉潛揚矣。罔  
司曰。汝等名何云耶。對曰。妹曰黑砂女。妹曰眞砂女。因共到高  
門岩。則妹黑砂入海。久而不歸。妹眞砂視之。曰。妹不歸。疑爲鮪  
魚。息絕歟。然我入海。如妹。息絕而不能奉揚神劍。願公與刃。



斬拂彼惡鮫等而可奉揚御劔彌於有功者我等二女共可爲  
末社神誓則與刃入海斬拂鮫魚輒奉潛出御劔真砂亦息絕  
矣此黑砂真砂者黑濱白濱之魂神也得祭主早吸之神爲奉  
鎮坐權現二女之蜃矣因司太歡喜則入船曲浦湊崇御劔爲  
神躰營宮於高風浦定祭田祀儀矣又立黑砂真砂之社號若  
御子矣因司之船繫所曰日向泊也又略記の次れ文小  
緣起略曰人王六十代醍醐天皇御宇昌泰之初神光震耀帝  
闕詔博士使十二人占之僉曰豐城速吸之劔氣也獻襟頗感  
其靈威詔而被遣勅使長陽云日本紀略に校むるに此文に  
符へる條あり但し昌泰元年十二月  
九一日丙辰天東南方有電光炫耀四方又有迅風と云事ハ  
何也又諸社へ奉幣使を遣されし事ハ屢のれど其内小ヤ

いウ、凡諸社の緣起と云物此類の神異必ありあ  
とあ也中頃僧徒の手に成るが多けまハあ也 未臻神  
廟既爲野火燼焉覓神劔於灰中長陽云覓一本にを  
不見の二字に作る 忽焉掛  
清地之松枝也詔幣乍到輒收劔於花画而立神社於曲浦清  
地蓋神之所以詫也是ヨリ神事祭祀ヲ定祭田ヲ寄附ス是  
ヲ基本トメ今ニ至醍醐帝ヲ祭テ天子  
社ト云封内ニ廟アリ清地ノ松ハ今尚有夫婦松ト云株根  
ヨリニ股ニノ二木ナカラ空ニ聳靈松神木ナリ○長陽云  
本文の幣乍到あど若ハ愆文ウ詫も託小ヤ天子社を天然  
社ともよを以よしいうある稱小ヤ夫婦松ハ古のハ枯て  
今ハ植繼あるよしさて本註の二木を二木ハ誤小クとも  
思へど彼武隈の松ハ二木を都人いうと問ハ見きと  
答へむちふ哥のれハ次小當社祝詞とて天地乃常磐堅磐  
爾豐饒志海乃部乃重浪歸留曲浦清地乃中津磐根仁大宮  
柱太止敷立天高天原仁千木高知天速吸名門六柱乃神達



乃坐須太登前爾。大御巫等宇豆乃幣帛乎以天稱辭竟奉久。四方乃因乎。安久平久知志食登申事乃由乎。聞志食登恐美。恐美毛申壽歌二首。天ノ狹霧地ノ狹霧ヤ六柱ノ神ノ坐ス速吸ノ名門。曲浦ノ重浪歸ル清地ノ濱ニ幾世歴ヌラン神ノ宮居ハ祝詞一品。神歌二首。往古ヨリ當社ニ唱來也。と云。本文畧記の文中に訓点差仮名おど施せるハ長陽ガ物しぬるお。次の豊後國志の文も同じ。唐橋君山主の豊後國志。海部郡早吸日。小ハ速吸祠記曰昔者伊弉册尊神浮潛潮中以濯汚昇于高門岩。長陽云伊弉册尊神と思へど。下文に稱曰速吸比咩神と云。男神を比咩とまを以へきに非稱バ本ハ伊弉册尊等と云。或物戸伊弉諾等。与母津國を伴歸まして。与母津戸。喫の穢を祓給ハむと。二神共に禊給へるに記せ

るふと多思へハ。當社も女神の禊と傳しものう。い。其ハとまれ。此地を禊此処と云るハ信難。此事下に論ふ。し。稚御子兄弟二女神。供奉防衛伐林除地鎮座于田川穗浦。稱曰速吸比咩神。蓋高門岩佐加東北海上里許。今名牛嶋是也。長陽云高門岩を牛嶋の事と云るハ。甚く差へる。彦云へり。牛嶋ハ高疾と共に。六所の一よて。固よ別所ある。稚御子。白濱黑濱神其所居之址。今呼曰稚御子鼻田川穗浦始鎮座地。今呼曰古宮村。崇速吸神。故古呼此水門。稱速吸門。長陽云速吸門の稱。吾ガ説と。大寶元年奉神宣移神宮于曲浦清地。曲浦呼爲和多浦。清地呼爲素娥。後作洲賀蓋佐加古稱稚御子以漁師事。教民因以海部名其國。長陽云郡名風土記。小ハ此郡百姓並海邊。泰昌二年。因司以靈神之由。秦白水郎也。因曰海部郡と云。○速吸名門異考古史傳六附錄。○十



聞於<sup>ス</sup>是<sup>ニ</sup>列<sup>ス</sup>官<sup>ニ</sup>社<sup>云</sup>。長陽云泰昌ハ昌泰の誤あるべし。是より

し事前に引<sup>一</sup>曰。神武東征時。到此門祭。速吸神。遂創<sup>ス</sup>鴻基。

長陽云此事皇<sup>典</sup>ハ見え交。其爲<sup>テ</sup>神所祭。即天神氏時物也。其質似簡策。長

二尺餘。濶寸半。厚三分強。凡二十餘枚。韋條編之。皆神代文字。

如<sup>シ</sup>科斗。漆書多。漫滅。韋亦將絕。手不可<sup>レ</sup>近<sup>之</sup>。慶長五年冬十月。

罹<sup>ニ</sup>兵燹<sup>ニ</sup>而滅<sup>適</sup>得<sup>レ</sup>此<sup>舊</sup>記<sup>ヲ</sup>。収載<sup>以</sup>廣<sup>異</sup>聞<sup>云</sup>。と<sup>ハ</sup>也。西遊雜記

の神社と号せる有り。此祭神詳あらむ。社傳まいふ。神武天皇東征。何らんとて。日向より発し。此浦よて船揃有し時。祭り置給いし海神よして。海内第一の苗地といふ。古しへハ大社よて。科斗の文字。此記有る。竹筒を以神躰として。外種。此神密。慶長年中迄も。此社よ有りしに。云々。神社残りなく。火をかけて焼討と。此時科斗の竹筒焼失。數の神密も。うせらりし事也。今ハ燒殘也。し竹筒有り云々と。何也。筒ハ筒の誤。小ても。何る法し。前に云々と。約えとる。如に。彼

合戦のさまを。神主の太田方也。岡の城よ。押寄せて。火攻せし。しに記せれと。実に。さかへる。か。し。何る。故に。畧。ま。初。此。戦。又。炎。上。の。さま。吾。が。家。譜。に。記。せる。ハ。始。祖。田。近。長。祐。主。家。の。爲。に。古。田。重。則。と。共。に。一。手。の。勢。を。率。て。家。康。公。の。大。津。の。本。陣。に。出。し。際。黒。田。如。水。侯。の。讒。訴。屢。何。也。て。公。の。疑。累。を。大。津。の。御。陣。を。退。く。此。時。白。杵。の。城。主。太。田。政。信。石。田。よ。黨。して。旗。揚。げ。し。故。主。人。中。川。秀。成。侯。白。杵。城。攻。ら。る。い。れ。報。を。船。中。よ。て。聞。ぎ。直。に。船。を。白。杵。へ。榜。寄。せ。む。と。せ。し。に。風。惡。く。て。海。部。郡。保。曾。浦。に。著。と。也。是。に。也。陸。路。を。押。さ。む。と。佐。賀。関。を。過。る。と。き。白。杵。方。れ。押。れ。勢。に。出。會。ひ。蕙。破。り。て。通。ら。む。と。戦。ふ。に。白。杵。城。よ。り。援。兵。多。出。て。三。日。に。及。へ。ど。破。得。む。爰。に。旗。下。よ。り。大。友。家。の。浪。士。田。原。紹。忍。関。社。の。神。官。等。が。立。騷。ぐ。多。見。て。敵。上。浦。へ。火。を。挂。る。と。覺。え。さ。り。され。ハ。戦。難。儀。を。先。ち。て。自。燒。せ。む。と。て。民。家。を。放。火。し。さ。る。ハ。神。社。も。炎。上。に。及。と。也。さ。て。其。を。眞。竜。が。遠。祖。関。延。氏。憤。り。後。方。を。討。と。る。也。身。銃。よ。て。長。祐。を。狙。撃。し。つ。を。在。合。兵。當。の。敵。延。氏。を。討。と。る。也。○。豐。後。志。の。文。何。ま。ま。で。唐。橋。氏。の。言。う。と。り。や。紛。ら。ハ。し。列。官。社。ま。で。云。字。以下。唐。橋。氏。の。言。う。と。思。へ。ど。東。征。云。々。西。遊。雜。記。に。社。傳。と。何。れ。ハ。猶。祠。記。の。文。ある。べ。し。終。に。云。字。何。る。よ。て。皆。う。ら。引。書。の。文。か。と。を。れ。ハ。



得昔記と有りて唐橋氏の言に似と云凡て漢学者の引書  
をいふある愛と云古文小ても己が意の隨に漢文に記し  
て記せる故に文は狀小て時代を考ふる事れをらさるを  
遺憾き事おせうし祠記の事次論ふべし○簡策に似と  
るちふ物此事を秀彦に問ふにう初て聞及びし事おしと  
云へば畏々れと御神懸ハ何にませると問へハ是ハ神秘  
とて何らハに申さぬ事おつら劍にませりと云死されハ  
簡策に似とる物ハ什器あるべき古社何に用ひし物  
ヤ新井君美主の云ハれさる出雲大社に神代を傳ハる  
と云漆書の竹簡を始藤原貞幹ウ好古日録に古竹簡凡二  
十四枚曲尺ヲ以度ルニ長八寸許廣五分餘上下韋ヲ穿ツ  
孔アリ鑄所ノ篆奇古々色掬スベシ疑フベクモナキ漢前  
ノ物也云々とあるも同類の物れるはく又予現に東京博  
物館列品の古器物中に貞幹ウ云処と同狀の物を見と云  
墨書と覚しき漢字処々消殘さり是を思ふに手簡とハか  
かる物にハ非るう今も竹以て尔さまに製して消息を物  
し巻納免て紐を結びて封をさし人に贈りてバ受る人ハ  
披見て後其文字ども拭去りさて返事書して答へむハ古  
雅にして紙の冗費を省くはさし返事書して答へむハ古  
しも何れバ今此卷物ハ如く至重の事記して秘おく物小

や何らむ此を漢物と思ふ右二此傳就是々む知らる  
そ負幹が例の僻を云うし右二此傳就是々む知らる  
密に始て古宮に鎮座昌泰に清地小遷座とし祠記ハ神代  
より古宮に鎮座よて大密又清地に遷座昌泰ハ列官社の  
時と云年号ハ同くて事實の年歴太く差へるハい々に  
やかくて因志に引ける速吸祠記と云物いうある書ハ  
いと見まよし物あるが眞竜秀彦等も知らざるをいふ  
れハ社藏よは非るべし按ふり肥後人井沢長秀ウ著述書  
目に豊後速吸日女社記と云か何也志ハ總て社字を祠  
字に替へ式あるはをら神祠と改め記されれハ井沢の  
社記の事ハ何らむ但し西遊雜記の説ハ志と全同傳と  
聞ゆるに紀行あれは關よて記しとるべく記中に秀彦が  
家に藏する布袋石筑波山と云盆石を見愛する事ハ何  
れハ上浦まで行するハ疑れれど白黒二濱の筆記に於  
て其憶測妄記ある事著明きを見ればもしハ肥後に行き  
て井沢氏此社記を見さて後よ巴杜撰せしふも何らむ  
又唐橋氏因志の撰ハ大業よて因中此何らむ神佛寺  
此緣由どもを掲ぐると各其什藏の緣起文書を摘採  
りて一定此文法に成文をるべきあらむハ校合居うを鎮座  
と遷座の年代を取違へしゆも何らむ又ハ祠記と云物



井沢氏の社記此事ありとをれば、彼人今昔物語を、私に改訂删除せし如く、さうしらを加へて、遂に社傳と差異のいできしにも、あらむ、熟く訂をべし。○志よ、伊井冊、等、神淨潛潮中云く、とあるハ、今も關人に、彼、禊の段に、上瀬ハ、瀬急と詔ひし上瀬を、阿波の鳴戸下瀬を日向の小戸中瀬を此佐賀、關の湍門ありと云ケ、あるを思へバ、關よさる説のありし、小こそ、又神武東征云くとあるも、彼日向泊を神武天皇ハ、大御船泊し所と云説、是亦此地に行ハる、事あり、されと天皇命を、徒に日向とまをべき、非れバ、日向、國司れ、うと然る説に思ハれ、又速吸之門の御禊の地に非るは、神典上に灼けま、予ハ志をらく略記、此傳に従ふべし、さう、簡策に似たるちふ物の事ハ、虚妄とも得定をむ、さて此神社、古ハ位田を附られて、御榮ましく、字、建久二年、小大友家の領地とぬ、位田ハ廢れて、大友家と、二十五貫の社領を寄附せられ、弘安八年の圖田帳よ、國領佐賀、郷百五十丁とある處の三浦本に、此所佐賀、關十一丁、關權現御神領地、頭大友兵庫殿とあり、社頭よも二十五貫文之本田、都合二十丁三反九十歩、天文二十二

年の地檢帳を始、代々此檢帳、又神主領田畑五丁九反、二百四十歩、天正十八年の書付など、今に存りとぞ。大友家亡びて、加藤清正主此時と、肥後熊本侯の領地と成、加藤家を、細川家に及ても、五十石の地を寄附せられ、奉仕の神官も多にありて、神主一員、宮主一員、檢校一員、祝主一員、祠官八員、神人二員、あり、僉其職世々襲て仕奉れ、とし。又神馬の牧五十町餘あり、馬五十四と、多き時八百匹、小も及ぶとし、さて中頃、小ハ僧侶も仕奉りて、關六所大權現おと唱へしを、六所とハ、高嶋、御崎、高疾、蘿嶋、五嶋、速吸のとし、略記小見えと、天明六年に吉田家に告て、古此社號に復しと、とぞ、凡古き神社は、衰へませるが、多く、榮ませるも、僧徒の手に、穢あどし給



牙於小。此御社はしめ。今にかく御榮ませるあや。いづも尊  
く愛ふ。此事にかむ。序に。當社に傳ハる。祭奠れ式あど。聞け  
日。小の月ハ廿九日あり。先神主ハ廿一日より。潔齋を。與下ハ廿二  
日。たり。檢校以下。與下まで。ハ廿五日より。潔齋を。與下ハ廿二  
親。何る者。を撰ぶ。其故ハ。親を喪ひし者ハ。其死。尸に。手觸  
る。故に。手。穢。あ。き。を。撰。ぶ。あ。り。手。穢。あ。り。者。ハ。親。亡。き。者。と。雖。苦  
う。ら。び。さ。て。廿八日。御衣。を。撰。び。織。女。と。し。清。淨。の。室。に。齋。籠。り。て。  
屍。に。手。觸。ぶ。る。女。子。を。撰。び。織。女。と。し。清。淨。の。室。に。齋。籠。り。て。  
亭。績。織。せ。し。む。亭。績。む。に。ハ。指。を。淨。水。に。濡。を。唾。を。ど。付。る。  
を。得。び。機。具。も。別。に。備。へ。此。日。と。翌。廿九日。ヲ。三。十。三。日。蔓。行  
事。と。云。ガ。何。也。蔓。を。以。て。與。下。以下。を。三。度。こ。さ。し。む。晦。日。神  
幸。何。り。御。身。濯。會。と。云。御。旅。所。ハ。社。前。の。濱。あり。晝。後。淡。の。さ  
し。入。る。を。待。て。渡。御。あ。り。著。御。あ。り。て。飛。久。米。と。て。白。米。と。小  
麥。と。雜。へ。と。る。を。神。輿。に。向。ひ。撒。り。長。陽。云。久。米。と。ハ。内。侍。所  
の。御。供。米。を。オ。ク。と。稱。給。へ。る。を。思。へ。バ。供。米。の。義。あ。り。事  
疑。お。し。次。に。御。津。を。進。は。菘。を。以。て。製。さ。る。人。形。小。て。神  
輿。に。濯。ぎ。奉。る。又。神。官。以下。淖。一。二。滴。掌。に。受。て。戴。く。さ。て。神  
輿。を。始。群。參。ま。で。茅。の。輪。を。潛。脱。く。是。ハ。茅。輪。大。中。小。三。個。造

り。大ハ神輿。中ハ神具。小ハ神官。以下。參集。人。まで。潛ぬ。く。る  
て。三。貫。目。許。あ。り。大。貝。を。蚕。等。と。り。獻。る。古。ハ。必。高。疾。ガ。水。よ  
て。潛。捕。る。事。あ。り。し。多。近。世。ハ。所。を。撰。バ。以。て。炊。雜。へ。て。活。し。お  
く。を。三。十。六。顆。進。は。米。と。小。麥。と。を。等。分。に。炊。雜。へ。て。活。し。お  
ろ。し。を。戴。く。神。事。畢。り。て。火。之。晴。の。神。酒。と。て。神。酒。神。饌。の。お  
ろ。し。を。衛。士。所。に。て。彼。獻。備。の。鮑。の。お。ろ。し。を。給。ひ。酒。飯。の。賄  
に。歸。り。て。火。合。と。て。彼。獻。備。の。鮑。の。お。ろ。し。を。給。ひ。酒。飯。の。賄  
の。忌。服。令。と。ハ。甚。く。異。少。て。珍。し。故。に。別。に。字。し。て。異。聞。に  
備。ふ。當。社。忌。制。一。父。母。忌。七。十五。日。相。火。廿。一。日。一。兄。弟。忌。五  
十。五。日。相。火。廿。一。日。一。伯。叔。父。母。甥。姪。從。兄。弟。孫。共。廿。一。日。一。懷。妊。夫。婦。共  
五。月。迄。社。參。一。產。婦。忌。七。十五。日。相。火。廿。一。日。一。血。男。子。一。日。  
相。火。七。日。一。相。火。廿。一。日。一。難。産。百。日。相。火。廿。一。日。一。初。男。女。互。一。結。緣。七。日。  
相。火。廿。一。日。一。相。火。廿。一。日。一。初。男。女。互。一。結。緣。七。日。  
一。交。合。三。時。一。聞。觸。七。日。一。赤。痢。七。日。一。猪。汁。一。日。一。葱。三。日。  
一。大。蒜。十。四。日。一。葦。七。日。一。鬼。狸。七。日。一。猪。汁。一。日。一。葱。三。日。

○速吸名門異考古史傳六附録 ○十四



日相火廿一日。一干鹿百日。相火廿一日。一鳥三日。一燒失百  
日。一江。一。七日。右此旨堅可忌也。延德四年六月。於當宮。自古  
服之無制。所謂服者。禮儀以來之。礼法ナルヲ以テ用ヒズ。唯  
忌齋而已。ヲ以テ專トス。神道ニ切ナル所可知矣。右忌齋者  
古傳以誌置也。自餘小忌者。本制ヲ以推順而可憚矣。との  
り。文中誤脱。何りと見ゆ。私に改むべきに非祿ハ。本の  
盗に書し。延德四年ハ。即明応元年小て。六月ハ。改元の前  
あり。右此外天文以來。此文書ども多に。何れど。さまで。ハ。掲  
出。交。る。む。凡。山。間。地。を。ど。ハ。人。心。狹。狹。直。小。て。古。此。手。風。も  
存。れる。も。れ。お。れ。ど。海。辺。ハ。人。心。狹。狹。直。小。て。古。此。手。風。も  
る。が。多。き。お。ら。ひ。殊。に。當。地。ハ。船。著。小。て。商。人。お。ど。多。く。出。入  
り。遊。女。も。多。に。在。る。所。お。れ。ハ。淳。薄。の。事。多。お。る。べ。き。に。お。う  
神。事。の。鄭。重。お。る。ハ。いと。尊。し。殿。宇。も。大。藩。の。官。費。を。以。て。營  
まれ。し。事。お。れ。ハ。莊。麗。盛。大。小。し。て。當。國。の。一。宮。と。ま。は。西。寒  
多。神。社。お。ど。よ。ハ。なる。に。優。り。て。座。ま。せ。せ。さ。て。予。う。郷。の  
農。民。等。ハ。伊。勢。此。大。御。神。小。准。へ。て。關。大。神。宮。又。御。閱。様。と。も  
申。し。神。官。を。太。夫。配。札。家。多。旦。家。詣。る。を。半。参。宮。と。お。る。へ。参  
宮。せ。し。年。ハ。作。物。実。よ。く。路。錢。を。費。せ。も。詣。る。が。利。あり。と。て。  
詣。る。者。多。し。然。依。多。今。度。ハ。御。改。制。に。神。領。ハ。更。れ。也。數。多。ハ。神。官

も。み。お。廢。られ。社。格。も。郷。社。に。お。せ。給。ひ。熊。本。縣。此。事。依。し。に。  
小。野。秀。清。が。祠。掌。お。せ。て。只。一。人。仕。奉。る。の。み。お。せ。何。お。る  
し。お。秀。清。ハ。秀。彦。が。子。小。て。彼。何。は。れ。か。く。や。お。と。お。死。所。に。  
鎮。せ。ま。し。く。て。尊。祀。御。社。お。る。お。也。朝。廷。に。聞。え。て。官。幣。社  
小。も。立。ま。さ。む。と。し。も。お。也。後。云。今。ハ。大。分。縣。の。所。管。と。お。也。  
あり。関。真。竜。祠。官。と。あり。明。治。十。三。年。此。神。官。改。換。よ。て。祠。官  
の。外。に。祠。掌。七。員。仕。奉。る。事。と。ハ。あり。ぬ。此。祠。官。ハ。明。治。四。年  
に。定。給。ひ。し。府。社。縣。社。郷。社。小。奉。仕。る。長。官。の。目。右。に。云。牙。る  
小。て。苗。官。八。員。の。祠。官。に。非。む。思。紛。ふ。べ。う。ら。ば。右。に。云。牙。る  
言。も。小。て。此。神。社。の。概。此。事。實。知。ら。れ。と。也。○。下。浦。に。珍。彦  
神。社。も。座。坐。せ。也。此。神。社。ハ。豊。後。国。志。に。祭。推。根。津。彦。神。乃。珍  
彦。命。也。珍。讀。訓。宇。津。故。土。人。誤。曰。宇。都。宮。神。此。祠。祭。舟。具。爲。神。



少何也。後云真龍此言に。此神社往古は然る迄死御社を  
らむ。彼慶長の兵火に罹給ひてよ也。形ばか也此社にま  
し。元祿の頃に一社を營みしれ。猶小祠を也。近年屢  
官に請て。縣社に立坐し。社號も推根津彦神社也。改稱し。去  
し。明治十二年。神殿拜殿か。とれ如く造營して。ま。然る迄  
き。神社とはあ也ませ也。祠官祠掌ハ。早吸日女神社也。兼務  
小て仕奉を也。境内に血池と云か。あり。こハ昔近辺に住け  
池水忽血の色とありし。うバ甚く恐み。漳を汲来て。灑清め  
初。日びまをせ。バ。又もと此清水とありし。より。尔云よし。  
今ハ。何せ。よりとぞ。又神木に千年松と云。古松ありし。う。往  
し。天保。度の大風に。枝多く折損。禊て。ありしを。嘉永度。此風  
し。残れる枝も折盛て。遂に。僵木とあり。遺材さへ散失。より  
し。を。近頃。少。此。切。片。を得て。殿内に納置け。也。とぞ。古人の詠

とて。古の里の。栄も千代の春うけて。急をみま。珍彦神ハ。早  
きらむ。神籬の松と云。哥口碑に存れるを。し。  
吸日女神社の枝社小もま。して。木本社とまを。以とぞ。師の  
山餘考に添て。碧川。好尚主の云ハ。れし言小。師の既く言ま  
しハ。總て世。此中の事。多。バ。海神の教諭し給ふ。と。少。から  
ぬ。中。軍旅。術策の。機。要。た。も。殊。小。多。志。と。謂。れ。云。く。と。て。綿  
積。神の。穂。手。見。命。に。潮。満。珠。潮。淵。珠。を。授。奉。也。て。兄。命。を。憶  
苦。ま。を。以。方。を。教。奉。給。へ。る。住。吉。大。神。の。神。功。皇。后。に。種。く。の  
神。呪。と。も。教。給。ひ。波。瀾。を。新。羅。國。の。半。ま。て。押。騰。て。御。軍。を。接  
給。へ。る。稻。村。が。崎。を。干。浮。と。ち。し。て。義。貞。朝。臣。の。義。兵。を。接。給  
し。事。あ。ど。を。始。諸。越。小。て。も。張。良。が。蒼。海。君。此。助。を。得。し。類。其  
例。と。も。多。く。掲。げ。て。説。ハ。れ。さ。る。言。の。中。に。驚。根。津。日。子。命。の  
大。御。船。迎。奉。給。へ。る。事。を。以。て。抑。あ。の。神。ハ。海。神。也。御。未。裔  
あ。ら。む。其。御。祖。綿。津。見。神。の。天。神。の。御。子。也。御。軍。子。助。成。し。ま  
れ。バ。あ。る。思。欲。し。て。仕。牙。奉。ら。し。免。給。牙。る。事。と。推。量。ら。る。然  
め。有。也。て。其。御。勲。功。も。許。多。有。々。む。云。く。ま。打。羽。拳。來。人。と  
有。る。打。羽。拳。師。の。説。小。後。よ。羽。扇。と。云。ふ。物。小。て。其。を。振。拳。て  
遙。に。招。死。扱。來。る。を。謂。ひ。固。也。也。天。皇。の。軍。師。と。め。稱。ふ。べ



き神如きハ此を以て皇軍伐指麾を事ハ更亦も云ハ文  
亦布種ク此用ひ方ども多ある事と知られり。とありて  
羽扇此用法を傳へて諸葛亮等ケ用ひし事又密境の神眞  
の專用給ふ也。石井篤任仙童其師仙七也。授かりし法を  
以て師も製造せられし事多。委く記されり。披見るべ  
し。さて推根津彦神ハ師説小ハ大綿津見神の御子。振魂命  
の御末。武位起命の御子とせらるれど。世に此神ハ猿田彦  
大神再現形し給ひて。皇艦を導給ひ。鴻基を輔け給へる。か  
に非き。別に書せる物也。猿田彦大神亦も御母。蟬見比  
賣神ハ海に由るのみ。あらば己命。あざう。此海に隠ませ  
るを思へハ。海神の御量と。述べ。岐命をも。神武天皇をも導  
奉給へる。あらむも知るへうら。右ハとも。神武天皇をも導  
命。大御船を導奉給へる。よ。大和。小。て。此。献。策。將。神。託。を。得  
て。敵。地。に。入。也。香。山。の。社。中。此。壇。を。取。來。て。神。を。祭。り。遂。に。鴻  
基。を。開。う。せ。奉。給。ひ。し。偉。勳。を。バ。今。の。朝。廷。い。う。に。見。行。を。ら  
む。眞。竜。等。が。社。格。の。昇。進。を。請。へ。る。時。教。部。省。小。て。御。調。也。  
し。に。他。に。此。神。を。祭。れ。る。社。を。以。て。縣。社。小。ハ。列。祢。給。へ  
也。と。聞。く。今。別。格。官。幣。社。は。祭。ら。れ。給。へ。る。神。等。此。比。例。を。思  
牙。を。疾。く。に。も。官。幣。に。与。り。ま。ま。へ。き。を。あ。る。○。後。藤。眞。守。ハ。

大和、固、城、上、郡、大神、社、の、後、山、に、在、て、高、宮、と、申、が、式、内、大  
和、日、向、神、社、小、て、推、根、津、彦、命、に、ま、せ、る、よ、し、云、れ、ど、式、内、予  
を、三、本、見、る、が、皆、神、坐、日、向、神、社、と、此、み、り、て、大、和、ち、ふ  
文、を、冠、れ、る、ハ、大、和、志、あ、る、も、同、し、大、和、と、し、も、あ、ら、む  
大、和、氏、此、祖、神、あ、る、故、少、據、と、も、あ、る、べ、う、ら、む、を、眞、守、が、説  
を、日、向、を、り、発、し、神、武、天、皇、を、迎、奉、給、ひ、し、故、の、稱、を、り、と  
云、る、が、り、迎、奉、り、し、天、皇、の、御、本、國、を、社、号、に、負、ま、せ、ら、む、ハ  
最、に、遷、き、の、み、あ、ら、ば、國、名、の、日、向、ハ、景、行、天、皇、の、詔、よ、也、起  
正、て、遷、の、後、の、事、あ、れ、バ、彼、命、此、神、の、座、坐、を、も、乞、也、も、速、吸  
小、ハ、曾、て、縁、あ、き、稱、あ、る、を、や、  
之、門、に、由、り、る、小、あ、む、○。早、吸、日、女、神、と、ま、を、以、ハ、い、の、あ、る  
神、に、ま、ま、ら、む、其、神、が、祢、知、依、依、記、め、お、き、れ、し、社、傳、小、六、神  
又、六、所、也、也、磐、土、命、大、直、日、神、底、土、命、大、綾、津、日、神、赤、土、命、大  
權、現、  
地、海、原、諸、神、也、ま、れ、抄、此、ハ、書、紀、第、十、一、書、を、る、伊、弉、諾、尊  
の、身、濯、の、時、成、ま、し、神、等、を、捕、へ、と、る、小、也、大、地、海、原、諸、神



を。一柱の神とせしむ。論ふまでもあし。只其上文に速吸  
名門ちふ目の何るに依れるのみあす。凡て社傳ハ速吸名  
門を伊弉諾等の御  
禊の地として云へる言小て取難し。是ハ書紀に往見粟門  
及速吸名門然此二門潮既太急故還向於櫛之小門拂濯也  
とある小て御禊の地ハ速吸名門に非ること論を俟と交  
猶其櫛之小門を筑紫日向と第六の一書及古事記にあり  
もれ。前小引ける神歌云に天の狹霧地の狹霧や六柱の  
少何故大山津見神野稚神二神山野に因て持別て生ま  
し、神等歟と思へ。山野に因て生まし、神等也。此海門  
小座より遠き謂ふし。あえ昔事紀の始小天祖天讓日天狹  
霧罔禪日罔狹霧等とあるに在れる  
あどれ。豊後国志に引ける速吸祠記と云に伊弉冉尊と  
るも神典に據あし。畏々れ朽強てまをさば。若ハ速秋津比

賣神小ハ坐ざる。其ハ彼神を古事記小。水戸神と何也。大  
祓詞に荒鹽之鹽乃八百道乃八鹽道之鹽乃八百會爾座須  
也何ると。社地を清地といひ。社傳の禊祓の事に云へるに。  
符へをあす。後真守が六神社考を見れば、真守も速秋津  
の音シユウと。早吸のスウと。似寄れるあど云説ハ  
非し。大祓詞小ハ速開都比咩とも書りれとる字や。既小大  
人等も。記傳小ハ速吸也。は大祓詞に速開都比咩止云神。今  
印本に比字脱と。持可く吞食牟。也何る意小て。彼御禊小縁  
也故補ひて引也。まる神名ある傍し。と云ハれ。太古傳小ハ大祓詞に荒鹽  
鹽の八百道ハ八鹽道の。鹽ハ八百會と有縁を疑かく此云  
北大壑速吸門也事也。其是御禊の時に生坐せる神等



此中に謂ゆる祓戸神四柱ハハラヒドノカミヨハシラは、小在オモシて祓除ハラヘ此功德イサコトを承ウケし給たまふば好ヨクと云ハれと也ナリ。此師説暗に社傳の赴に符へり。又前に記せる此社の大祭六月毎日オノノチよて、御身濯會ミミヤサハヒと稱ナヅケふちど思合オモヒアヒをとべし。神實カミサネハ何ナニ此神コノカミもまよまよしはせ。早吸オモヒ日ヒ女メ々々稱ナヅケをハ。地名トコロノナに縁ヨれる御名ミナ小オて。實オノハ太古オホコトをと也ナリ。此海門ウミカドに座坐イハをと姫神ヒメガミにまして其御社ミヤの無ナきは戕憂ウレヒ給たまひ。大寶オホタカラに到イては因司クニミヨトシ此過ヨヤ縁縁を待まち。靈異クニシズメ字ジ示シせて。御社ミヤを乞給たまひし小オぞとありけむ。○此迫門オモヒカドを速吸オモヒ名門ナカドと云へるとしハ。前に記せし也ナリ。略記リョクキに引ひくる舊記キウキの文ウチ此コノ如ごとくある字ジ猶委なほく云ハむ也ナリ。此地コノチを九州クニノナ小オては更さらをと也ナリ。豊後トヨノチの因中クニナカにや也ナリも。東アキに最オモさし出いる岬ミサキ小オて。伊豫イツノ因宇和郡ウヰノ佐田サタ岬ミサキ小オ對ムカひて海上ウミノ

七里セリ也ナリ。其半ミタビに高嶋タカシマ也ナリ。此嶋の事因志よ。在海東三千里半。蔚蒼無人。居とあり。高嶋の間地方を也一里許にして。彼高疾が水の暗礁クマツツミあり。此礁土人ハ。權現の礁と云ふ也。此礁セのあや社傳セに。礁セの頭カ丸マく水中ウミナカに入いるに隨まひて繞めぐ大オホ也ナリ。水面ウミノをと也ナリ七尋ナナノボをかと也ナリ此所コノトコロに横ヨコにあり也ナリ。内濶ウチノワカくて底ソコに白砂シラスナを敷しける事コト豊タカ此コノ如ごとく純白オシロイして衆色オホシロ雜カらまじり潔オシ白オシ也ナリ。礁セ此コノ四圍シホユキ津行ツキハヤ疾オシく漲ミナ也ナリ。渦ウヅまり也ナリ。物モノ何ナニ也ナリ吸吞スビノむが如ごとく也。因オて速吸オモヒと云ふ也ナリ。往いて天アマ明アカ此頃コノキタマシ宮主ミヤノサダヒロ阿部アベ貞寬サダヒロ云ふ人思オモひけるは。巖イハ此コノ有あちふハ然しかもあるべし。内小ウチノオホ白砂オシロイを敷しくや云ふ事コト信難ウケガタし也。豫オホて聞きく其巖イハ内ウチ蛇アヘ甚オホ多クく也。水ミヅ移うつも。常オホハ潜カヅく事字ジ許ゆるさば只ただ六月ムツキ廿八日ニハチヤツヒ



のみ神饌に備に捕といへば。其状を問聞かむと。老功ある海士に問試しに。海士答けるやうハ。彼暗礁を最奇し化所あり。己只一度潜するあといへ。水面を三尋をか入るる所に。東方を覺えて。人比膝を折て坐れるが如き岩あり。其廣一反をか入も何るほく見え。平にして海藻稻苗の如く生てい々長く美し。其岩をはられ四尋をか入て。北方を覺えて。まゝ膝の如き岩出ると。其岩の真中に。口の口より七八尺程も何らむ。切抜する如き穴あり。内を覗見れば。底白し。其穴小入て三尋をか入。其白く見えし處に到れを。白砂敷満ちて疊四枚敷く程も何らむ。最潔白あり。穴は回

濶くして。石壁に蛇多く著て甚大あり。其を捕らむとをる。布杵に。太鼓子耳比傍小で打たが如き音。何所をもれく響たて。下ると。漳湧騰るあや凄冷しく成し故。只一潜に蛇二個を捕得て上りぬ。後に思へば。其窟は北方。穴貫通り居て。渾れさし入るや。蛇岩にせうれて鳴ると。小ぞ何らむ。穴は奥を見しか。杵暗くて見え。このさき。怖しき處あり。其後六十尋に綱杖持行て。彼礁に。この海は深を測試みするに。猶底にハ得達かざりし。何十尋立や知るはうらび。其時捕獲する蛇は重一貫七百目何りし。其貝子孫に傳へむや。今に持て。此貝今何や。きう。今比海士を彼所に潜くを



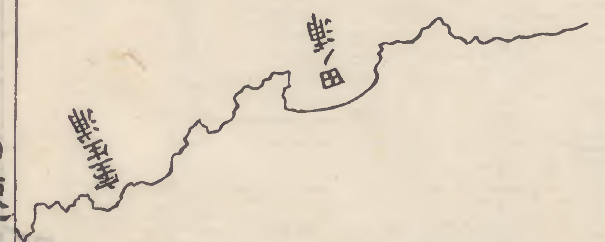
聞うびや語れ正やぞ。眞龍此話に。暗礁常ハ水中に没れさ  
るが。朔望此頃淖太く涸る。時ハ。少頭顯はる。南海を正淖  
此出入る湍門小て。淖いや速死に。此礁に觸れて二に破れ。  
向小て行合ふを正に。渦まき吸ふ。さし淖小ハ内海此方に  
渦ま死。引淖小ハ外海此方に渦ま。漁舟是に近く事を怖  
る。若過ちて其邊に行くやきは。忽吸寄せられて。いくに櫓  
を押し正て逃むとむやも。カ此及ふ牙死に非祓バ。櫓ど  
もを舟に横とて結つけて。淖此海にくく吸ハせ。渦に卷か  
れを正。淖直り渦の止むを待て。榜去るとぞ。櫓を横とてぞ  
れを。舟を豎小卷あされ。忽海底に吸没らる。を正。眞守も  
伊豫地

り渡るをり。此渦に吸ハれて。危  
きめに遭ふるを正。親語りま。うべしあそ太古に速吸名  
門やハ名おけ給ひぬれ。曲浦やを御社の前此海灣を總て  
いふを正。今ハ上浦やも上關とも云ふ。此灣口狭く内濶し。  
船多く泊也。此も因志に。濶四丁。長六丁と云。うべ曲浦と  
処小や覚束あし。書紀の曲浦ハ。鈴之屋大人のウラマと訓  
れ。さる如あらむ。○直養翁豊前の田之浦をワダノウラヤ  
上略小や。ゆさは曲字の一畫をあやま正て唱ふる小や。あ  
ど説ハれ。これどかむかりの事を捕へて扱とせむ。小ハ。此  
地下浦の南小も田之浦と云ふハ。同郡中穂戸郷小  
畝之浦と云。も正。翁かく少似よれる地名をし考證に備  
られ。あうら。鈴之屋大人の扱られ。正しく早吸ちふ社  
号の平家物語よりハ。続日本後紀小も。三代実録小も。延喜  
式小も出。るを捨ら。清地や云へるハ。此浦地方の總名あ  
れ。さるをいうにぞや。清地や云へるハ。此浦地方の總名あ  
正し。今を纒に御社此傍此村名小存れるのみを正。今佐

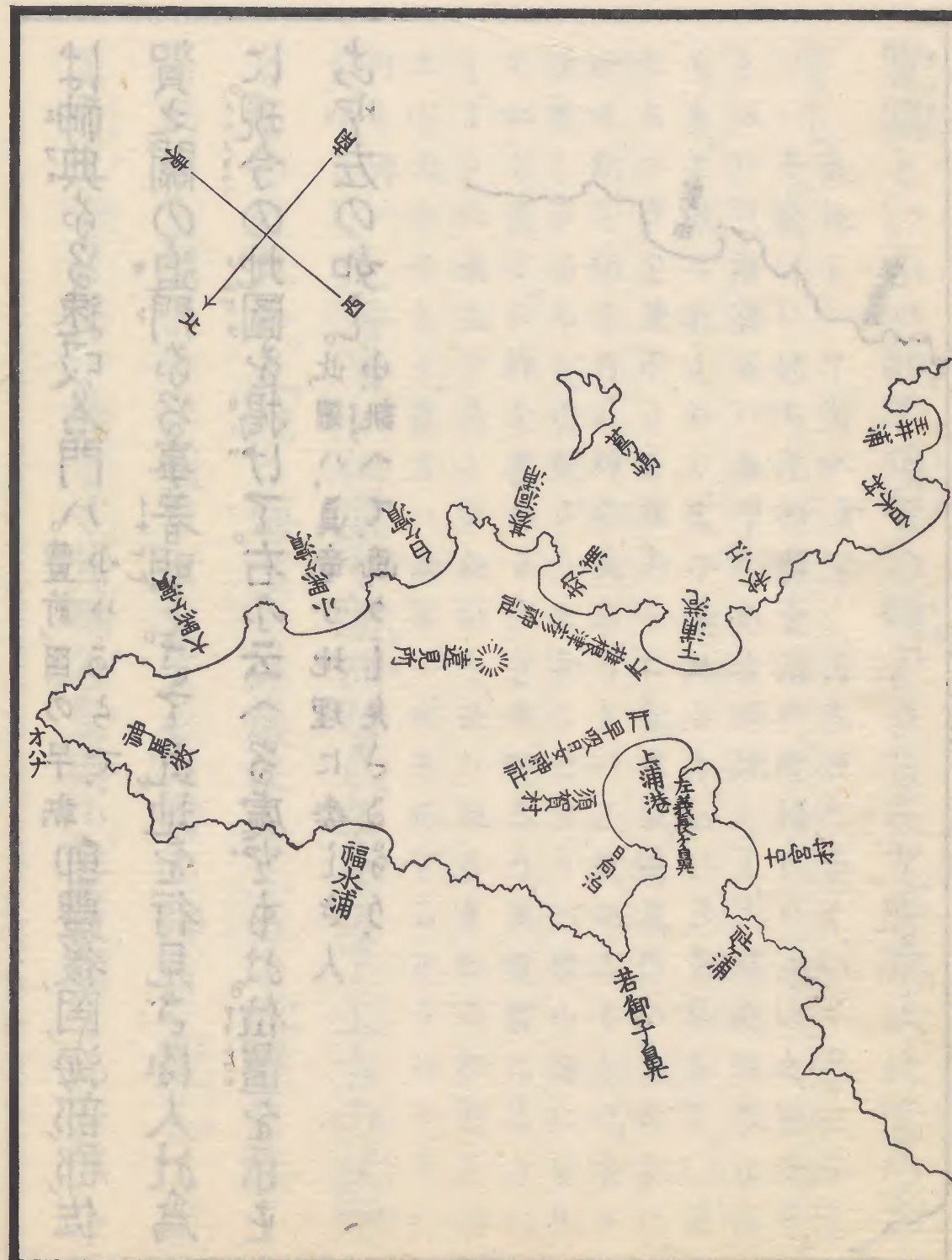


賀關カノセキといふハ。即ヤガて須賀スガの轉ウツ也トる也。唐橋氏カガ此言のお  
 奇シ。此地をべて海水清潔く。海底泥土をく。いくヤ玉オシ。  
 奇巖汀に峙ち。老松緑を瀼め。唐橋氏ハ海山之勝最奇。  
 と云ハれ。南谿子ハ画中にある心地して。人間の世界に  
 ら交と歎うれし如く。実小清地と云へき景色也。○前  
 に云へきを後れし如く。故あに記以。彼遠見所ハ風土記に。  
 烽式所とある内。此烽の趾ありといふ説あるを。此書半  
 清書しとる。必烽を置加るへき地勢あり。此説案に然るべ  
 ていと高く。必烽を置加るへき地勢あり。此説案に然るべ  
 し。まゝ佐儀長が鼻と云あり。此ハ往古年始の松飴を焼  
 上し処ありと。就てハ神事の式も。何也と。むぐ。今ハ  
 何も傳ハ。凡海濱ハ何處も新洲ニホス也。年を追て上古の狀變カハ  
 らぬと。凡海濱ハ何處も新洲也。年を追て上古の狀變  
 るものれれ也。此地ハ海深く岸巖にして。古の形變カハるはく  
 も何ら也。然れハ早吸日女ニギハヤヒメを以神の御名を。地名トコロノナに因ヨリ  
 て負オヒませる也と論勿く。其御名皇典ミコトノミ小。豊後國トヨノミ也。あるから

は神典ミコトノミある速吸名門トクソクナカドハ。豊前國トヨノミの早鞆トヨノミ  
 賀之關カノセキの迫門セトある事著明イタシムし。さて此地を行見イタシムざ。倭人ヤマトノヒトれ爲  
 に現今イマノイマの地圖チズを掲カげて。右小云へる處トコロ也。もれ。位置イロコロを示シて  
 也。左の如し。此圖ハ。真竜マコリウカ地理チリに委オシしき人  
小誂トコへて。画エうし。免オシとるあり。









○右此如く考定免了。紀記二典の文を辨了むに。書紀神武  
天皇の御卷小。是年也大歳甲寅其年冬十月丁巳朔辛酉天  
皇親帥諸皇子舟師東征至速吸之門時有一漁人乘艇而至  
天皇招之因問曰汝誰也對曰臣是國神名曰珍彦釣魚於曲  
浦聞天神子來故即奉迎又問之曰汝能爲我導耶對曰導之  
矣天皇勅投漁人椎橋末令執而牽納於皇舟以爲海導者乃  
特賜名爲椎根津彥此即倭直始祖也行至筑紫國菟狹時有  
菟狹國造祖號曰菟狹津彥菟狹津媛乃於菟狹川上造一柱  
騰宮而奉饗焉是時勅以菟狹津媛賜妻之於侍臣天種子命  
天種子命是中臣氏之遠祖也十有一月丙戌朔甲午天皇至

筑紫國崗水門十有二月丙辰朔壬午至安藝國居于埃宮乙  
卯年春三月甲寅朔己未徒入吉備國起行宮以居之是日高  
嶋宮也。古事記小ハ。即日向發幸御筑紫故到豐國宇  
沙之時其土人名宇沙都比古宇沙都比賣二人作足一騰宮  
而獻大御饗自其地遷移而於世紫之岡田宮一年坐亦從其  
國上幸而於阿岐國之多祁理宮七年坐亦從其國上幸而於  
吉備之高嶋宮八年坐故從其國上幸之時乘龜甲爲釣乍打  
羽舉來人遇于速吸門爾喚歸問之汝者誰也答曰僕者國神  
又問汝者知海道乎答曰能知又問從而仕奉乎答曰仕奉故  
爾指度稿機引入其御船即賜名號稿根津日子也。序に  
云打



羽挙を記傳にハ鳥此羽振如く左右袖を挙て打振つゝ來  
るありと云れされど師を打羽ハ羽扇ありとして説ハれ  
る言前に引けるが如し。○又記傳の本文ハ僕者國神  
の下に御名脱と記して。○又記傳の本文ハ僕者國神  
中にさうしうと思ハる其ハ此命即後田毘古神ありち  
ふ説に依る時ハ珍彦ハ速吸之門の淵ハよそへる一時  
の寓名ハ是實の御名あらぬ故に更に御名を賜へるに  
非じう。然故に記ハる宇豆毘古と御名をを素より省  
れたり々むも知るべうらに猶名を告らぬ例ありし云  
れされど足名推神の恐々れど御名を覚べと自給へるに  
吾ハ天照大御神の御名ありとのみ須佐之如此く書竝て。  
男神の御答まし、事もあり是ハ試に云。如此く書竝て。  
徒に打見てば書紀の文也。古事記の文也。齟齬て速吸門の  
所在甚く異なる如くあれ。熟く觀れば實ハ異なるに非  
ず。其ハ書紀をまべて漢土の歴史ハ文法を學ばれ。紀年し  
て記されしれを事ハ順次違ふ事なく。日向御船發し。速

吸之門小。推根津彦命。茂得給ひ。さて菟狹小幸まし。菟狹  
津彦。菟狹津媛大御饗奉。菟狹津媛を天種子命に妻せ給  
ひ。それと記筑紫小幸せる序あり。古事記ハ。語傳へし古事  
の趣を失ハざるを宗也。記されしも此故に。天皇命の御勤  
座の廉くをま。一連小記しお。立返。て槁根津日子命  
の。迎奉れる事。由を。又一條小書れしも此小。て。書紀に照  
して味。牙。槁根津日子命に遇給へるを。宇沙小幸ませる  
と。記前小。て。宇沙に幸まし。も。槁根津日子命の。導奉給ひ  
し。小。て。何。記。中。に。神。等。の。御。系。統。を。御。末。の。神。等。ま  
云へる文をり。記。し。お。死。立。返。り。て。其。祖。神。の。御。功。績。を  
事。を。大。人。等。ハ。思。洩。され。し。ハ。謂。ゆる。鹿。を。追。ふ。者。ハ。兔。を。顧



交ちふ諺の如く。大業おれ少けき事をバ、委くハ考られ  
ざりしをらむ書紀の菟狹津媛を天種子命に妻ハせ給  
るより後に別條に記されおむも此書名の日本書紀と  
云ひ古事記と云へるも、斯く辨ふるや、紀記の傳互に  
然る意をへあらむし。因云珍彦命の神武天皇の大御船を迎  
異ふる小ハ非。奉給へる時の事を書紀ハ兼給とある  
を古事記ハ兼給とあり是を鈴之舍大人法龜とある  
牙るとしてカメノセニノリテと訓れとる也。紀記の傳  
甚く異なる如くあれども、是も死龜の枯甲を舟として、兼來  
よせらるる古事記ハ其、射を謂て、龜甲と書かれ、書紀  
ハ其、用を取て、艇と書かれ、射を謂て、古事記に單に龜と  
のみハ無く、甲、字を加へられしを思ふべし。故予ハカメ  
ノカワラと訓む。龜甲を裏覆し、舟の形あるべく、  
是を舟に用て釣し給ハ、麻迦古弓天之波、矢とありて、雉  
子、射し弓矢を初ハ、天之波、士弓天之加久矢とありて、雉  
用とに、其名を変て書れしに、渡部賢ハ、此ハ死龜の甲、小ハ非  
紀記同傳あらむし。さて、渡部賢ハ、此ハ死龜の甲、小ハ非

也。海神の幸、魂、小して活龜あるべく、此時天皇海路に迷給  
むと。此、龜、小しも珍彦命を乗せて奉給へるからむ。彼丹  
後、因、水、江の浦、嶋子、釣獲て蓬萊を誘ハれしも、此、神龜の  
類あるべきと云へり。海神の皇軍を助成まつらむとて、  
此、命を奉り給へるあらむ。説ハ、既く碧川、好尚、主、師の  
三神山、餘考に、加記されし、りき、活龜とせむハ、列子湯問、  
篇に、渤海之東、不知幾億萬里、有大壑焉、實惟無底之谷、其、下  
無底、名曰、歸墟、云々、其中、有五山焉、一曰、岱輿、二曰、員嶠、三曰、  
方壺、四曰、瀛洲、五曰、蓬萊、云々、而、五山之根、無所連著、常隨潮  
波、上下、往還、不得、蹙峙、焉、仙聖、毒之、訖、之、於、帝、恐、下、流、於、西、極、  
失、群、聖、之、居、乃、命、禺彊、使、巨鼈、十五、拳、首、戴、之、迭、爲、三、番、六、萬  
歲、一、交、焉、五、山、始、峙、と、ある、よ、酉陽雜俎、諾臯記、に、邵敬伯  
と云者、吳江、北、使、に、頼、まれ、濟、伯、に、使、せし、に、其、帰、ると、死、水  
唇、を、免、る、と、い、ひ、て、一、刀、子、を、投、かり、其、を、所、持、して、三、年  
兩、河、の、間、に、住、る、に、夜、中、忽、大、水、あり、村、を、拳、て、没、り、し  
に、敬、伯、獨、榻、牀、に、坐、して、恙、なく、曉、に、至、て、之、を、着、れ、バ、牀、を  
一、大、鼈、あり、し、事、又、楚、辭、九、哥、河、伯、篇、に、河、伯、此、事、を、魚、鱗、屋、  
今、龍、堂、紫、貝、闕、今、朱、宮、乘、白、鼈、今、逐、文、魚、といひ、大、荒、唐、經、に、  
も、北、極、之、神、名、禺、彊、聖、龜、爲、之、使、也、と、ある、よ、師、の、三、神  
山、餘、考、に、委、く、引、り、れ、り、右、ら、を、以、て、海、神、の、龜、を、使、給、ふ



事を思合はべし。佐賀、関の海小ハ。今も亀多く住むをし。近頃、壘三枚敷くむかりのも此陸に揚りたるに、童數人乗て遊び、後に若者二人乗て海に出しに、人此乗れる間ハ、浮居て、人泳クへ、巴しクハ、忽海底に潜入するを、六神社考より、記せ。然るを直養翁綱目の文お巴せり。故從其国上幸之時、乘龜甲云く、遇于速吸門也。何る字。岡田宮を巴大倭国へ上り、幸ませる。道行の目れ文お巴せ云ハれとれ抄。いに目の文お巴せも。從其国上幸ちふ。其国と指を城。吉備おらびせせば、最初御船發し。日向に非で何国也かせむ。然るを中途ある竺紫今の筑前の巴せせられぬるハ、いか小ぞや。中途ある處を捕へて云ハむには、宇沙也も阿岐とも。考説の便宜、此處に定めらるべきものをや。古事記のら、ある文お巴おぢくてかく區く此論

て出来たるおれど、此記を撰バれし時小ハ、速吸門と云。正しく世に知れて、何り々む故に、之に從其国上幸之時と書うれ。速吸門云くよて、立返りたる文ある事ハ、示されしものあるべし。是を近く譬へハ、十年余も前に紀行書ける人ありて、鶴崎より舟出し、大坂に揚り、東海道を下、巴江戸に著ぬと記しおき、さて金毘羅小詣て云く、膳所、城、ハ、いうに、何りし、府中、おて、誰よ逢へ、巴、おど書らむを、後、世に見て、右此所を、下、総、あらむ、常陸、よやと論せむ。うおと打知れ、る事、故、其、国、を、ハ、掲、ざる、べきを、思ふへし。但し、他、国、人、こそ、速、吸、名、門、を、何、所、あらむとハ、論ひも、是れ、當地、小、てハ、往古より、其、名、を、亡へるに、非、オホヤマトノスクネハ、イッ。姓、氏、録、小も、大和宿禰出、ヨリ、カム、ミリ、ツ、ヒコ、ノ、ミコト。自、神、知、津、彦、命、也、神、日、本、磐、余、彦、天、皇、從、日、向、国、向、大、倭、国、到、ハ、ヤ、ス、ヒ、ナ、ト、ニ、ト、キ、ニ、ア。速、吸、門、時、有、漁、人、乘、艇、而、至、天、皇、問、曰、汝、誰、也、對、曰、臣、是、国、神、ナ、ハ、ウ、ヅ、ヒ、コ、ノ、キ、ハ、ア、マ、ツ、カ、ミ、ノ、ミ、コ、イ、テ、セ、ト、テ。名、宇、豆、彦、聞、天、神、子、來、故、以、奉、迎、即、牽、納、皇、船、以、爲、海、導、仍、号、カ、ム、ニ、リ、ツ、ヒ、コ、ト、マ、タ、ノ、ミ、タ、。神、知、津、彦、根、津、彦、能、宣、軍、機、之、策、天、皇、嘉、之、任、大、倭、国、造、也、何



正是ハ書紀を取られしる小も何るはく。あやに大和氏の  
 出自を云へる文小。天皇命の御動靜を主記されしに  
 非れば。考證に備ふはれにあらはれ。此文小も早勅を依  
 是據おし。古語拾遺ハ。大和氏遠祖推根津彦者。迎引皇  
 左。槃余守。發。自。日。向。赴。向。倭。國。東。征。之。時。於。大。倭。國。見。淡。夫。謂  
 之。還。來。復。命。曰。有。人。耳。名。推。根。津。彦。即。召。率。來。矣。と。何。印。本  
 誤字多し。推根津彦命を得給へるを。於大倭國と何ハ。太  
 じき謬傳を正。大和國よハ海をわや。か。承謬傳をれを。  
 速吸門の在処の扱に取難し。ヨエ。フ。ニ。ヘ。ロ。ハ。判。と。云  
 物ハ。此。幸。の。事。を。速。吸。門。ハ。御。船。發。し。さ。て。速。戸。を。過。給  
 ふよしに記し。何。正。て。速。吸。門。速。戸。異。処。ある。事。判。然。き。文。を  
 證に取。不。然。に。非。れ。バ。引。う。む。猶。云。は。ハ。神。代。紀。伊。弉。諾。尊。禊  
 の段ハ一書に。故欲濯除其穢惡乃往見粟門及速吸名門然

此二門潮既太急故還向於橘之小門而拂濯也何縁を思  
 ふに。豫母津國を正歸正ました。先阿波の鳴門我見をかは  
 し。湊急き故に其所を去て。速吸名門小幸ませるまで。禊給  
 はむ海門を覓行まむらむあれバ。中國道小ハ渡まはまじ  
 く。讚岐路小まれ土佐路にまれ。必四國道をゆぎ行ましむ  
 らむ。然れば九州の地に渡まさむハ。必此佐賀關の迫門小  
 して。阿波門の次に見をあらべれあや。其地理を推て知  
 るは。右に如く何の傳に依ても。速吸名門ハ早吸日女神  
 の鎮座に。此佐賀關の湍門やあを思ハる。れ。○速吸門  
 考に速玉之男神を。ハヤトモ云へる地名小似あをを志



也。何くれと説ハれとれ移。彼考總て此説ハ。今の早鞆ハヤトモの  
 湍門セト。即古此速吸門ハヤタメ也。と云る。小て。早鞆とハ速吸門ハヤタメちふ  
 言此訛ヨウナれ也。と云ふ論アハレあり。然るを早鞆やがて速玉ハヤタメの轉ウツリと  
 以類シと死ハ。其迫門ハヤタメ古也。ハヤタメと加。ハヤトモと加云  
 ひて。ハヤスヒ也。を稱イハぎ也。し事明けく。返也。速吸門ハヤタメ小非  
 る據ヨロコとハハれハあり。速玉ハヤタメ之男ヲ神ハ。古くたり。然申せし事。神  
氏録に見えて。古稱あり。事論を俟よ。○序小云古事記姓  
氏録の速吸門。神武天皇。紀の速吸之門。共に神代。紀に速吸  
名門とあるによりて。をべてハヤスヒナドと。地名の義に  
呼ぶとある。神武天皇。紀あるに。之字を加へて速吸之門  
と書われ。之を思へ。神代。紀あるに。外ハ速吸の二字の  
み地名。之ハ辞門ハ迫門をさ。言ゆて。之。小て。勺をき  
り。門を清て呼へ。きうとも  
思ハる。是ハ試に云のみ。  
 又万葉六ある。帥大伴卿の歌の

隼人乃湍門を。速戸此事也。云ハれぬ。是も其説當れ  
 るも此あらむ。今此早鞆ハ古く神龜カメ此昔也。ハヤトノ湍  
 門とい。牙也。し徵アハレ小して。ハヤスヒとハ云ハ。速吸門ハヤタメ也。ば。  
 別處トある證アハレとこそな。あり。大伴卿の哥。早鞆の考證。小ハ  
を要あり。又粟門。穴門の事。ハヤタメ。せられ。是も神代。  
紀小。往見。粟門及速吸名門。然此。二門潮既太急。と何れバ。粟  
門と速吸名門は。正しく別處也。及。字ま。二。字。然るを粟  
門。即て穴門の事。ハヤタメ。を。其。穴門。即今。此。早鞆の湍  
門。あれバ。是も返也。速吸門。小非。證とハ。ある也。直養  
翁。右三條の考説ハ。我と我説を破られ。論小て。返也。



長陽が翁れ説を辨アキマふる。助とハあるにれむ。然れ杼速玉之  
男神ヲノカミと隼人ハヤヒト乃湍門トモと速戸ハヤトモ神社ノ之ノ殘ノ同稱の轉とせられ  
るを只聊イサカ似イサカよれる稱呼を牽強ヒキツケられざるのみ小て固よ  
信難ウケガタし。又其を速吸門ハヤスヒアドちふ言れ轉訛ヨコオチリとせむハ殊ヘタカに迂ウヤカる  
む。粟門アハトをアハトと訓て。穴門アナド小牽強コヒキツケられざるハ師の採ら  
れざるが如く。又豐玉トヨタマと速玉ハヤタマと似とニ或ハ田浦タノウラを曲字  
の一畫を誤て唱ふる小や。あど云れざるも。共に説得られ  
とニととも思ハれぬ。中小も坦浦タンボのダンンや。曲浦マカウラのワダと音  
通へニと云ハれざるハ。いうにぞや。タとワと横に通ふを  
もととニとあれど。ンを鼻よニと出る音ニよて。五十イソ聯音レノの外あ  
り。是をニまニとムに轉さむ。右に論へるハニ。彼考説の首  
尾合ハで。いうニあるを辨ふるれみあニ。○師説小玄家に  
謂ゆる。陽谷。咸池。甘淵。大壑。尾閭。谷神。玄牝。歸墟。天池。朝夕池。

百谷王。天地之根。無底之谷。あニも皆我速吸名門を云へる  
小了。即大地の会門ホドあるが。列子湯問篇に。夏草が湯に答ふ  
佈言に。渤海之東不知幾億萬里有大壑焉。實惟無底之谷。其  
下無底。名曰歸墟。八紘九野之水。天漢之流。莫不注之。而無增  
無減焉。其中有五山焉。一曰岱輿。二曰員嶠。三曰方壺。四  
曰瀛洲。五曰蓬萊。云々。其上臺觀皆金玉。其上禽獸皆純縞。珠  
玕之樹皆叢生。華實皆有滋味。食之皆不老不死。所居之人皆  
仙聖之種。や何るを始。漢籍カラムにも云へる言をもあニら舉  
了。此上コあニく奇クシミく尊クシれ處あるニ。何くれと説かれニるが。  
此説ハ。三神山餘考。大扶桑國考。赤縣太古傳の二之卷を始。  
玄家の事に係る著書毎に説ちられニ。其文ニに引得











ひ形アラはし賜タマするが。右ミナト古傳コトワザの發出ハツシする初ハジメりて。即キ此コノ五聲ゴシヤウ  
此コノ元基ゲンキとハ爲ナれり。と何ナニ也ヤ。次ツギ小彼滑所コノカマシの奴ヌと流ナる奴ヌと  
良ヨクくと何ナニるさサゆを。彼滑カマシと詔ミコトノコトせるが。阿那アナ々々約ツク也ヤ。孔ア此コノ義ギを  
あせるを。しを。委マカく解トクうれ。と。右ミナト小引コノけるハ。要ヒツと何ナニ所  
我ワレのみ拔出ハツシする肌ハダままバ。熟ユクく本書ホンショを見て知るシ。即キ女メ會カも  
して。漢人カンジンの屍シ字ジを製ツク  
れるを。と思オモ合カを。べし。右速吸名門ミナトノナドの大地オホノチの會門カノカドあるを。し  
此コノ師說シヤウ小思合コノオモカを。法ホウ也ヤ。當國トウクニの風土記フウツキ  
昔者コノマタ經キヨ向日ニヒノカ代宮トヨミヤ御宇ミコノミヤ天皇テウ御船ミコノフネ泊トモ於ニ此門コノカド。唐タウ橋キヨシ氏ノの箋セツ叙キ  
一年十月イツネンジュウゲツ悉シツ誅シツ豐後トヨノチ土蜘蛛ツチクズ賊テウ十一月イツパツ至シ日向ニヒノカ國クニ蓋カシ是コノ時トキ王舟オウフネ  
經キヨ於ニ此コノ耶ヤ。と何ナニ也ヤ。長陽チヤウヤウ按アふに。十月ジュウゲツに直入チキヨク祿ロク野ノの賊テウを誅シツ  
ひ給タマへれ。ハ十一月イツパツ向日ニヒノカ幸キヨクハ。陸リクをりを行イままし。と。む。日  
向ニヒノカ高屋タカヤ宮ミヤに六年ロクネン居イと何ナニる。尔ニ長チヤウく留坐リウサるハ。專筑センシツ紫シの國クニと

を。鎮撫チンブ給タマハむとて。此コノ御事ミコトノコトあるべし。此コノ外ソトに。屢巡リンソ幸キヨクままし。と。高屋タカヤ宮ミヤに座マせせる時トキ其コノ國クニある  
御ミコト刀カ媛ヒメを娶ムスて。豐國トヨクニ別ワケ皇子ミコを生ナ給タマへる。此コノ皇子ミコ此コノ御名ミコノナを思オモ  
ふふも。豐國トヨクニ御巡幸ミコトノミヤブキ中ナカに生ナままし。と。ら。む。され。ハ。本文ホンモン國史クニシに  
符フハむとて。疑ウタガハ。海底カイテイ多タ生ナ海藻カイソウ而シテ甚シ美ミ。案ア此コノ郡クニ產ウツ海藻カイソウ海ウミ藻モ海ウミ落ラク諸シヨ  
ふふべきに。非ヒ。又マタ國志クニシ總門ソウモン。天皇テウ即キ勅トク曰イハレ取ト最勝サイショウ海藻カイソウ。謂イハレ  
藻モ俱ク多タ而シテ美ミ。と。何ナニ也ヤ。又マタ國志クニシ總門ソウモン。天皇テウ即キ勅トク曰イハレ取ト最勝サイショウ海藻カイソウ。謂イハレ  
郡クニ便ヒ令ニ以テ進シ御ミコト。本註ホンチュウの郡クニ字ジ。那ナ小コ作スる本ホンも何ナニり。久キウ老ロウ翁ウ保ホ都ト  
此コノ郡クニ便ヒ令ニ以テ進シ御ミコト。本註ホンチュウの郡クニ字ジ。那ナ小コ作スる本ホンも何ナニり。久キウ老ロウ翁ウ保ホ都ト  
れど。ホツメと云物モノも此コノに見え。り。や。知ら。ば。ニ。グ。メ。と。ハ。  
和名抄ワナヒナガシに。海藻カイソウ味アジ苦ク鹹ケン寒カン無ム毒ドク。和名ワナヒ迹アト木キ米メ俗用ソクヨウ和布ワフと何ナニる。  
グとギハ通トウへ。ハ。ニ。グ。メ。を。ニ。ギ。メ。と。同ドウ言ゴンにして。即キ和布ワフの  
義ギあるべし。ま。と。ニ。ナ。メ。と。を。り。と。ハ。和生ワナヒ海藻カイソウ柔ユ之シ海ウミ  
藻モの義ギあるべし。因ユ曰イハレ最勝サイショウ海藻カイソウ門カド今イマ謂イハレ總門ソウモン者モノ訛也ヒソカ。と。何ナニる。總門ソウモン郷キヤウ  
は。此コノ佐賀サガ關カンと同郡ドウクニ中ナカ小コして。南方ナンポウに海上ウミノウチ七里餘シチリヨ何ナニ也ヤ。今イマ海  
嶋シマに保戸ホト嶋シマと云イハレが。何ナニ也ヤ。其コノ稱ナリ存ゾクれり。其コノ地方トコロ此コノ出崎デシマを。蒲ハ  
嶋シマと云イハレふ。是コノを。唐タウ



橋氏ハ、呼、曰、訶摩登、是、亦保登之轉訛也。と云れり然も何  
るべくや。○後、云、明治十二年此郡區改制に、海部郡を南北  
に分、とれ、總門、郷ハ南海部郡に屬き、佐賀、郷ハ北海部郡に  
屬け、○又序、云、保戸嶋より東北二里許、佐賀、関、と、東  
南五六里、北澳に、向、嶋と云、が、何、り、此、嶋、明治六年の頃、備前  
國人、戸川、七郎と云者、賜、ハ、り、て、開墾、せ、む、と、せ、し、に、嶋の、状  
いと、奇、しく、嶋山の、頂に、佛家、に、用、ふ、須、弥、坦の、如、き、磐、石  
り、又、巖、鋒と、や、名、く、べ、から、む、嵩、柱、二、本、峙、立、り、故、此、鋒、巖  
の、間、に、道、を、取、て、須、弥、の、如、き、磐、石、上、に、神、社、を、建、む、と、思、立、し  
と、し、あ、る、が、半、途、に、し、て、七、郎、死、て、止、り、し、を、豊、後、人、二、三、  
人、謀、り、て、開、拓、に、手、を、著、神、社、を、も、建、む、と、し、あ、り、き、此、も、神  
遊の、地、心、や、何、ら、む、彼、三、神、山、ハ、無、底、之、谷、と、る、歸、墟、中、に、在  
る、と、し、是、三、神、山、の、屬、嶋、あ、ら、む、も、知、べ、う、ら、ば、師、ハ、仙、界、に  
謂、ゆる、方、丈、洲、ハ、我、淡、路、固、あり、と、云、れ、き、右、等、此、参、考、に、あ  
る、べ、く、れ、む、記、此、彌、郡、米、之、門、又、你、那、を、い、ろ、に、訛、れ、を、せ、て、  
加、へ、振、る、あり、保登、呼、お、は、べ、く、を、思、ハ、れ、故、考、ふる、に、彼、最、勝、海、藻、の  
生、て、滑、所、あ、る、か、ら、に、今、門、ハ、義、以、て、稱、る、に、を、非、じ、の、  
戸、邊、

に、を、行、見、る、事、如、し、自、其、地、に、行、て、親、く、古、老、に、問、試、さ、せ、  
ら、む、小、ハ、浦、人、の、口、碑、に、存、れ、る、傳、説、の、何、ら、む、も、知、れ、ば、也、  
ま、れ、此、速、吸、名、門、に、程、遠、か、ら、ぬ、處、に、海、藻、と、い、ひ、保、登、呼、い  
牙、る、あ、や、か、さ、く、本、辭、經、あ、る、師、説、小、由、何、に、て、お、お、ゆ、  
早、鞆、小、ハ、若、海、布、名、産、小、て、海、布、川、の、神、事、あ、ど、あ、る、と、穴、門  
を、彼、滑、門、の、義、と、し、て、見、あ、む、彼、方、由、何、り、て、聞、か、る、り、師、ハ、  
云、れ、ざ、り、し、故、小、序、○海、也、ハ、万、物、を、生、出、け、彼、玄、牝、之、門、を  
に、驚、う、し、お、く、あり、云、へ、倚、を、也、廣、く、總、て、此、海、小、も、及、ぶ、し、て、ウ、三、也、云、へ、る、と  
ふ、師、説、に、因、て、思、ふ、に、此、説、古、史、傳、二、之、卷、彼、社、傳、の、略、記、小、  
速、吸、名、門、の、名、門、を、洋、の、義、あ、也、釋、き、と、也、然、れ、を、ナ、ダ、は  
ナ、ド、の、轉、さ、る、言、小、て、生、門、の、義、あ、依、字、總、て、此、大、洋、小、も、及  
ぶ、し、稱、へ、る、に、を、非、さ、る、う、會、門、ハ、聖、生、門、の、義、其、生、を、ウ、ム



少い。生の本聲。凡る字ハ潤の義あるを。本辭經小云。此其潤。亦も。やめて滑也。同意の言あり。漆をウルシとも。ヌルを塗とハ云あり。又濡ル潤フあとにて。潤滑同意の言ある事を知るべし。風土記の多生海藻而甚美とある美字をウルハシと訓べく。是も潤と。さて前小引ける。本辭經ある海苔も。生和滑。艇乗の乗あるが。糊小同くして。是亦滑潤小義同し。漆肉醬と糊に類と。彼穂門小生ちふ。海藻亦も。海苔也。同類の物。凡るに。海藻海苔。よと藻の同類ある事ハ。和也。文選云。海苔之彙。海苔。海苔。音早和名。毛。一云。毛波水菜。即海藻也。とあるが如し。海苔生て。滑所ある處。大地の會門。那麻を。人躰の會戸小も及ぶして。然云へるを。し。此師説ある。會門會戸。あど熟字し。とるを。ホトと訓むに。門戸の字をトとよむ。小ハ非也。義を取れるのみ。亦。ホトとハ

會所の義小して。ト小ハ所字。填れり。滑所。又次に云ふ。御會所の所字を思ふべし。其會戸字俗にオメコ又メ、コと云ふ。是ハ御會所。女會所の義ある。牙。會は海藻と同稱あり。其海藻の彙。凡る藻形も。會門のホに通ふ。免ふ。腿。ま。會戸を俗にボ、と云。ボとモ。親く通ふ音。相轉り。相。通ふ事ハ。こ、に云。益をへきに非也。詞の緒に云へり。轉通言の例と。同言ハ同意ある例と云。篇を。披見べし。右小云へる言。柿も考。こ。して。風土記。此傳の滑所に。縁ある。遠く。大地の會門。と。縁速吸名門を。豊後ある。遠記を知る。牙。し。明治五壬申年七月。佐賀關の旅舍。小。て。記。し。



世々物学ゆりぎら多ある中も古学も萬  
の学は本初学もあはれは古学も其  
ひきつゝの正北石笛伊吹通舎の平人  
此法説は依持し時みりあらぬを  
大人志の願し——  
臨びては持威古法を  
はも存るの陽人の考を——  
臨る  
まよる知多きとて又座の棟も積元を  
其物の事もひきあはるる汗をぬき

多うは中も物も古史傳のいふ言を  
とるははしとてまよるも水は然る  
其傳は速に名門の在るをば海西の某  
が己が國は道は口を伝ふ鞆の端の  
まよる説を採りては——  
臨る  
其人皆は門も思ふの抑速に  
は我國は道の格は伝ふ其の端の  
を爾れの方め説を——  
と大人を

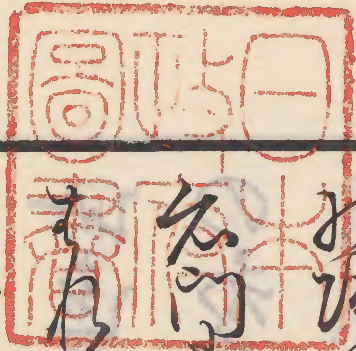


伊吹通舎は宗原の慶く宗を塵ひぢり  
以て感をもつて伊吹といひて悦く懐乃  
一此業ありて一こぞやに甘味をなす  
都実の所を宗流の一母の宗ありて  
まゝとて年々思物つらまゝの不勉く  
学力一あらざる爲場大人の両況を得る  
辨くぞしる悪ぢりて一を直日神の  
宗を宗ひりて一を柱根津彦邦の宗を

ひりて一は伊吹通舎の教子よる同國家  
法田近長功主い入理は同意と思ぢり  
此速吸名門宗考一宗を考へ一楯の音  
の考ありて一は伊吹の根は怒りて  
一は伊吹通舎の二世の宗をえせたり  
志ありとも見事一は伊吹の宗を考へ  
故有今世よしとて伊吹の宗を考へ  
法考一は伊吹の宗を考へ一は伊吹の



之平子の改録と云ふ海志と云ふ是に被る所なりと  
 我れあまの編に云ふもよ改め置あり  
 米のもろもろの我れ地志の押れを云ふ改録  
 此語よりびて人出らば成りて云ふ速吸  
 久門も源の事なり其れは世の向きく顯  
 有るに爲家大邦も怪神ありて云ふ  
 とや思ひ置かざる事其の情も地志  
 事らぬ解申さざる物思も云ふ事ありて云ふ



所書りて云ふ所ありて云ふ其れは  
 了あとも近ぬりて云ふ其れは  
 其物一物其の秀座も物ありて云ふ  
 時ハ改録は十七年と云ふ事の中なり云は  
 可吸りの形其れは云ふ事ありて云ふ



明治十八年二月十二日御届

同年三月廿日出版

定價金三十五文

大分縣士族

著者 田近陽一郎

豐後國大分郡大分町  
五千四百三十二番地寄留

同縣士族

早吸日女神社祠官

出版人 關 眞 龍

豐後國北海部郡関村  
六百八十三番地住



